

2013年 希望号

（愛称ねね）が取り上げられています。結婚し、しばらくして長浜城に入った彼女は、ペア・ルーラー（夫婦統治者）として絶大な信頼を夫から、また諸大名や奥方たちからも得ていきます。それを裏付ける多くの手紙が存在しています。当時の宣教師たちは、直接秀吉に

志を掲げて
池田勇人
NHK大河ドラマ『八重の桜』が好評です。鉄砲で戦った山本八重が、後に新島襄の妻となつて、同志社創立に関わつていく姿は、実にあつ晴れ！ 男性の為政者中心の歴史に、陰で支えた女性たちがいたこと。しかも彼女たちは武士道に生きた「レディ・サムライ」であつたと、新しい歴史学を提唱している方がいます。『ハーバード白熱日本史教室』（新潮新書）の若き研究者北川智子さんです。

ユダ族の代表として二人の斥候となつたカレブ。彼の母親もまた、信仰と志に生きた女性ではなかつたか、と私は想像しています。それは彼の父親がユダヤ人ではなく、エサウの子孫ケナズ人（ヨシユア十四・6）であつたからです。父親がエサウの子孫で、その子がいきなりユダ族を代表するとは、その父がよほどの手柄を立てたのか、あるいはカレブ自身が勇氣ある傑出した人物だったのか。それらがあつたとしても、ユダ族から大きく信頼される母親の存在があつたのではないか、ということとす。



カナンの地偵察の時四十歳だったカレブは、荒野放浪の後、ユダの山地のヘブロン（同盟の意、エルサレムの南三八キロ）を求めています。『どうか今、主があの日に約束されたこの山地を私に与えて下さい』（ヨシユア十四・12）なぜヘブロンだったのか。それはその地がザクロ、いちじく、特にブドウの山地で、「乳と蜜の流れる地」（民数記十三・2）だと知つていたこと。さらにアブラハムを初めとする族長たちの墓があつたからです。私たちにとつての志を掲げて求めるべき「山地」は、何でしょうか。

日本クリスチャン・ペンクラブ（JCP）

発行責任者・池田勇人 事務局・三浦喜代子方

文は信なり

〒131-0043 墨田区立花 4-6-13
TEL&FAX 03-3616-8621
郵便振 00170-0-161838
HP: <http://jcp.daa.jp>

ではなく、北政所としての彼女を通じて、布教の許可を願つたとのこと。



光りを求めて 駒田隆

わたしの信仰は、右に、左にゆれながら、イエスを信じ、求めています。不完全な信仰だからこそ、いつもイエスが必要なのです。八十路に入っても、まだ迷っている自分を見ると、だらしがない、としか言えませんが、それだからこそ、求める心が必要でした。迷っているからこそ、イエスを求める心が、まだまだ盛り上がってくるのです。

そう考えると、迷っている自分は、何と幸福なのだろうか、と思えて来ました。闇の中にいるからこそ、光りが恋しいのです。闇の中にいるからこそ、光りを追い求められるのです。光りを探している自分は、幸いなのではないのでしょうか。心の貧しいわたしは、この一年、光りを追い求めて、さらなる信仰を求めて、信仰を歌い上げていきたい、と考えています。

あなたの天幕の場所を広げ、住まいの幕を惜しみなく張り伸ばし、綱を長くし、鉄のくいを強固にせよ』 イザヤ五四章2節

今年の計画
★例会は隔月ごとに。★詩歌の集い・童話エッセーの集いは例会のない隔月ごとに。
★2014年にあかし作品集『春夏秋冬』発行を目指して、『春』・『夏』・『秋』・『冬』にちなんだ400字と1200字で3作品（テーマ検討中）のあかし文章を書きためていく。★一泊研修会、文学散歩など屋外でのイベントも検討中。

為政者のために祈りを 山本披露武



為政者のために祈ることに抵抗を感じていました。党利党略のみに血道を上げていっている政治家を信じるのができなかつたのです。

結果、原発事故の対応がよくないといっっては、外交交渉がま

ずいといっっては、減入り、ニュースを見ることさえ厭うようになってくるのです。そのような私でしたが、ある日テレビで外交問題について厳しい表情で語っておられる政治家の姿を見ている内に、嘆いているだけではよくないの

だ、このような難問に取り組んでおられる政治家のために祈らないといけないのだという思いに駆られるようになり、その場で祈りました。

晴れがましくも神様から2013年というまつさらな年をいただきました。スタートするに当たり、この年への希望、期待、抱負、計画、夢などを書き合いました。

と、それまであった政治に対する不満や不信が消えて、厭なニュースをも直視できるようになってきたのです。その時から、私も為政者のために祈ることができるようになりました。これからも、ずっと祈っていききたいと思っています。

新しい年に 榎 尚子

昨年還暦を迎えたわがJCPは、また再びスタートラインにたちました。



先日、庭掃除をしていましたら、椿の木につぼみがたくさんついてい

るのを見ました。こんな寒い薄曇りの空の下で、しかも冷たい風の中で、春を待つ命があったのでした。

「古いものはみなうしろに過ぎ去り、よろこびの歌が聞こえてくる。山も海もゆたかにかがやき、めぐみあふれよ、新しい年」(讚美歌Ⅱ152)

今年春・夏・秋・冬をテーマにあかし文章を書いていきます。どんな人にも平等に季節がめぐって来ます。季節は神様からいただいた恵みです。その時どきに神様に感謝したこと、つぶやいたこと、なぜですかと問いかけた出来事や思いがありました。

未知・未踏の魅力

三浦喜代子

新しい年を迎えるたびに私の心は熱く疼く。一年が孕んでいる未知・未踏に惹かれ、体当たりしたい思いになるからだ。

先年、ニュージブランドへ旅した時、マウントクック遊覧飛行に参加した。セスナ機が山肌すれに近づくたびに思わずのけぞったが、真上から氷河を見下ろしたときは息もつけな

いほど感動した。氷の川は広大な幅のまま一気に下降し、折

からの日を浴びて淡いオレンジ色に輝いていた。一瞬、天の隅ではないかと思った。

おそらく天地創造以来、未踏のままなのだ。あるとすれば神



様の足跡だけかもしれない。

新しい一年は氷河をはるかに超える巨大な未知・未踏の世界だ。私はそこを進むのだ。

胸躍る一方、不安や恐れは限らない。しかし、神様は先だつて歩き始めておられる。迷子にならないようにびったりとついて行こう。この一年は何色に染めていただけるだろうか。

雲の柱が動くとき

土筆文香

常に何かを書いていた。昨年はOBIの卒業論文、長編児童小説と短編童話数編書いた。長編を書き終え卒論を提出したら、そのあと書けなくなつた。



この二十年、ひとつの作品を書き上げると、一週間もしないうちに次の作品を書きはじめていたのに……。

創作するとき、ストーリーが結末まで一気に思い浮かび、それから書きはじめる場合と、結末はわからないが、書いているうちに何とかなると思って書きはじめる場合がある。後者の場合は迷いがあり、たい

てい失敗する。未完のまま放り出してしまふこともある。前者はゴールが決まっているので、迷いなく書ける。神様がストーリーを与えてくださったからだ。

雲の柱が留まっているときは、じつと留まったイスラエルの民のように私も待つことにする。雲の柱が動くとき、新しい物語が生まれる。今年待つ年になるのか、再スタートの年になるのか、神様だけがご存じである。



十二月某日、キリスト教徒ではない友人とで会った。彼は「世界の終わりは来るかもしれないけれど…」と笑い飛ばした。そんな雰囲気を感じているのだ。私は続けた。

年の瀬に世界中の人々を騒がせたことがある。昨年十二月二日に世の終わりが来るというニュース!? だ。あるテレビ番組は一年も前から騒いでいたというし、新聞も各紙が取り上げた。

世の終わりと神の世の始まり

亀井正之

「書き上げます」から、(自信がないのでそっと小声で)書く力を与えたままと祈る日々になりそうである。

今年こそ、「書き上げます」から、(自信がないのでそっと小声で)書く力を与えたままと祈る日々になりそうである。

毎年来るようなアクシデント(入院、介助等)に見舞われていることも原因だが、それを理由に納得している甘さがある。



「いつでもいいですよ」の言葉に甘えていまだに書けない。

四年前から童話(三篇を一冊に)を書くように出版社から言われている。

「いつでもいいですよ」の言葉に甘えていまだに書けない。

書く力を折る

長谷川和子

新たな年を迎え心機一転、書く意欲が湧き上がってくる。この気持ちが持続しますようにと祈らずにはいられない。なぜなら、決意を新たにしても知らぬ間にペンを持たなくなり、JCPの課題文で手一杯といった実情になつてしまふからだ。

「そうです、聖書には世の終わりが来ると二千年も前から予言されているんですよ。その時期は不明だけれど。これは偶然の出来事ではなく、神のご意志によることなのです」。

世にとって世界の終わりは恐怖だ。しかしイエス・キリストは世の終わりの時に来て、新しい神の世が始まると聖書は預言している。このすばらしい重要なメッセージが、最近、教会で聞かれないのはなぜだろう。『主イエスよ、来てください』(黙示録二二・20)。新年にあたり、私の一番の願いである。



わが心を主の馬桶となし 遠藤幸治

この身と心を主の馬桶(まぶね)となし

／とわに 宿りたまえ

クリスマス礼拝で歌われた『讃美歌21』二五六番の最後の節は、わたしの願いそのままであったから感動して歌った。

ところが、牧師が説教の冒頭で同じことを言われたのである。不思議なこともあるものだ。主を信ずる者の心がこんなに一致するものかと驚嘆した。

今年目標、抱負を問われたら私は何と答えよう。

昨年暮れ、原発の被災地、川俣町から弟夫婦が上京し、スカイツリーの最上展望台から都心を眺めた。隅田川の流れと東京湾に夕日が映えて美しかった。

弟と話しているうち、彼は言った。「俺も洗礼を受けたいが、どうしたらいいんだべ……」。

帰郷した弟夫婦はクリスマス・イブに川俣教会に行った。一人でも多くの人に伝えたい。

かっこいい先輩に

西山純子

二人の孫たちが、息子夫婦と共に我家へやって来ました。この時だけ私は「スミコおばあちゃん」という愛称で呼ばれます。



孫とは不思議な存在です。何のためらいもなくハグし合いい、お互いが言葉以上の温かな親密な喜びを感じています。十歳と八歳の二人は、既にそれぞれの個性があり、人格もしっかり持っています

たまたま、箱根駅伝マラソンが放映されていたので、その一部を観ました。十歳の孫と話しました。「体力だけではないね。頭脳と精神の力も勝負だね」走り出しから往路の分担力走の道程を、いかに走りきり、次に繋げるか。彼は明るく真剣な様子でこの会話をしました。

孫たちが「またね!」と賑やかに帰って行つてから、私は思いました。そうだ、この子たちにとって、私が一番してあげたいこと、それは、折々書く便りや触れ合いの中で、人間以上の存在の方を、的確に示していくことだと知りました。年の初めの祈りでした。

賛美を届ける

山本千晶

夫と元旦に映画館へ出かけた。ミュージカル仕立ての「レ・ミゼラブル」を観た。フランス革命のさなかに生き抜いた人々の姿を、役者が演じながら歌うのだ。音楽と共に、言葉が力強く響いてくる作品だった。

登場する全員が神様に覚えられ用いられていることが伝わってきて、勇気が与えられた。ふと思った。どれほどの人が、自分が神様に

覚えられている価値ある者であると知っているのである。賛美を捧げ続けるのは、翻弄される時代の中で困難なことかもしれない。

しかし、かすかな希望を求め、残された力を振りしぼって捧げるうめき声のような賛美は、神様と自身との和解に繋がり、自身の価値を知る瞬間をもたらしてくれる。



今年も、いくつかの賛美の集まりに出かけていく。集まる一人ひとりに神様を知る和解の時間が計画されていると信ずる。賛美を通して、それを届け続けたい。

成したまえなが旨

島本耀子

昨年十月に牧師夫人が急逝された。突然、教会から大きな存在が消えて、私には解決できない問題が一举に噴き出した。私自身は、讚美し祈り証して、伝道できているのかと、疑問に捕らわれていたときだった。

翌月、S 姉が八十六歳で召された。ご次男のS 兄の導きで信徒になっていたが、横浜市内には珍しく因習の強い地域にあるS 家は、仏教式の葬儀をするのではと、皆が懸念した。

しかし、ご長男は故人の遺言を守り、キリスト教の葬儀で送ってくれた。参列者は教会を知らない人ばかりだったが、プログラムのすべては抵抗なく受け入れられていた。大好評だったと、S 兄が涙をもったの報告だった。私の好きな聖歌二九五番に、主のみ旨が成るとき、わが内に在るキリストの姿を他の人は見るだろうとある。

私は主のみ手にある土くれにすぎない。信じて従っていけば、主はみ心のままに成してくださる。今年も常に変わらぬ主を見上げて、



良き証にして行こう。

祈り・願い 富岡国広

今年の抱負とか一年の計画と呼べるものではありませんが、数年来心の内にある、祈り願ってきたものがいままも継続しています。

特別に目新しいものではないのですが、私にとっては日々「特別に目新しいもの」なのです。それは、人知をはるかに越えた神の愛——主の十字架による罪の贖いと復活のことで、この絶大な主の愛、恵みにあふれた福音を宣べ伝え、証すること以外の、また、これ以上の働きはないとの、熱い思いに押し出されたからです。

同時に、全世界に二つとない聖書、そのみことばによる兄弟姉妹との分かち合いから霊的な成長をすることこそ、主御自身が喜ばれることと信じる由です。それが今の私の心の内の「祈り・願い」なのです。

『十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です』（1コリント一・18）。

蛇年に想う

松下勝章



今年、「蛇年」。年賀状を使って、「蛇」が日本中を駆け巡った。だからというわけでもないだろうが、機を一にして、『ウルトラ右翼』と呼ばれる人物が率いる政権がスタートし、日本経済を復興すると打ち出している。

経済復興といっても、「サラ金」に頼って、「新築住宅」を建てるようなもので、結局は、国の借金を増やしても、景気づけを行おうというものらしい。オリンピックの誘致も叫

ばれている。めでたいことだ。

とはいえ、人は、目に見える景気回復に弱い。株価も上がり、消費も増えれば、(いいじゃないか、やるじゃないか)ということでも、次の選挙も、『ウルトラ右翼』が勝利してしまうかもしれない。そして、その後、本懐の、教育改革、改憲、日本軍…。不気味である。

間抜けな柄の蛇の年賀状を買って、ある旧知の同信者に「間抜けな蛇が日本から居なくなりますように」とメッセージを送った。イエス君が代は千代に八千代に。そう祈りつつ。

あかし文章道への招待

池田勇人 著

(ヨベル社・本体1000円+税)



あかし文章を書きたいけれど、どこから手を付けばいいのかかわからない人のために、ことばをつむぐ修行、修練の方法をやさしく解き明かした、「あかし文章道」入門書です。ご注文はJCP事務局まで。

編集後記

★リニューアルして3号目の今回は、旗印も勇ましく【2013年希望号】です。暮れの24日に、皆様にメールで寄稿をお願いしました。さすがJCP、締め切りを待たず続々と原稿が届き、慌てて紙面を大幅しました。今回もY・S 姉の粉骨砕身の努力により、レイアウトもみずみずしく見事なレター誕生となりました。次号は新緑燃えるころとなりましょうか。(K・M)